

(書式1)【候補者用】

① 立候補者の 姓名と所属	村上道夫（大阪大学感染症総合教育研究拠点）
② 立候補の理由と 抱負（400字程度）	<p>リスク学の社会実装を進めるとともに、学会としてその学術的評価を支援していくことが重要だと考えています。私は、これまでの役員立候補の際に、①学際性・俯瞰性を更に発展させること、②社会との協働に関する学術的評価を高めること、③日本リスク学会の知を広く社会と共有すること、を通じて日本リスク学会に貢献したいと抱負を述べました。第17期、18期の任期中には、リスク学研究の編集委員長として、その定期刊行、投稿規定の改定、および研究成果の社会的な共有に貢献してきました。また、多くの方のご支援のおかげで、査読の質を維持しながら査読期間の短縮を果たしてきました。年に4回定期刊行され、誰もが無料で閲覧できるリスク学の専門誌の意義はこれからもますます高まると思います。引き続き、リスク学の深化と社会実装、および、学術的評価を支えられる学会・学会誌でいられるよう、力を尽くします。</p>
② 本学会における 活動歴	<ul style="list-style-type: none"> ・日本リスク学会の第17期、18期役員（法人第6期、7期：2020年7月～2024年6月）の理事として、編集委員長を務めた。リスク学研究の年4回の刊行、特集企画の立案、投稿規定の改定、査読期間の短縮等に貢献した。 ・2018年度第31回日本リスク研究学会年次大会にて、実行委員長を務めた。本大会では、多数の参加者が集まったことに加え、大会の特集論文も複数号にわたって掲載された。 ・2021年度第34回日本リスク学会年次大会にて、実行委員（理事会委員）を務めた。 ・日本リスク研究学会レギュラトリーサイエンスタスクグループ（TG）にて、第1期（2014年～2016年）の主要メンバー、第2期（2017年～2019年）の共同代表、第3期（2020年～2022年）、第4期（2023～2024年）の共同代表を務めた。第3期の次期リスク学事典に関するTGの共同代表、原子力災害の防護方策決定の正当化に関する検討TGの主要メンバーとして活動した。 ・年次大会企画セッションのオーガナイザーとして、「知ってるようで知らない!?～基準値の根拠を探る2～（2014年度）」「リスク管理の歴史学（2015年度）」「身近で見過ごされてきたリスク2（2016年度）」「日本水環境学会共同企画セッション：水系感染リスク研究の最先端（2017年度）」「価値と規範からリスク研究の深化と更新を問う（2019年度）」「福島からCOVID-19を、COVID-19から福島を考える（2020年度）」「新型コロナウイルス感染症をめぐるレギュラトリーサイエンス（2020年度）」「次期リスク学事典について考える（2021年度）」「マスギャザリングイベントにおけるリスク評価・管理：検査とワクチンを事例として（2021年度）」「SNS時代のクライシス時の科学的情報発信のあり方を考える（2022年度）」「除去土壌や除染廃棄物の県外

	<p>最終処分に向けた課題と新たな取組み（2022 年度）」「リスク学の視点から PFAS 規制のありかたを話し合う（2023 年度）」「除去土壌の県外最終処分に向けた社会受容性に関する研究 ―環境総合推進費研究から見てきた重要事項―（2023 年度）」を企画、開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本リスク研究学会誌・リスク学研究には、筆頭著者・共著者として 26 報の論文・原稿（総説論文、資料論文、情報、レター、書評、巻頭言）が掲載された。 ・「リスク学事典」では第一部第 1 章[1-5]を執筆した（平井祐介氏との共著）。 ・日本リスク研究学会「2017 年度奨励賞」を受賞した。
④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)	<p>東京大学にて工学（博士）取得。科学技術振興機構研究員、東京大学リサーチフェロー、特任助教、特任講師、福島県立医科大学准教授、大阪大学特任教授（常勤）を経て 2021 年 8 月より現職（大阪大学教授）。</p>

(書式 2) 【推薦者用】

① 推薦する候補者名	村上 道夫氏
② 推薦者の姓名と所属	小野 恭子・産業技術総合研究所
③ 推薦理由 (400 字程度)	<p>村上氏は、傑出したリスク学の研究者である。基準値、水系感染症、放射性物質、COVID-19 といったテーマをリスク学の視点で解析され、その成果を数多く発信されてきた（査読付き論文・原稿数は 237 報。うち、筆頭は 84 報）。また、リスク評価、管理、コミュニケーションの幅広い段階でリスク学の社会実装も実践されており、文部科学大臣表彰「科学技術賞科学技術振興部門」、日本野球機構「NPB 特別功労賞」など、受賞が多数ある。特に、"Risk communication"の論文数は世界一（直近 10 年間。Scopus による検索）である。本学会においても、学会誌等、多数の論文・原稿の発表で貢献され「2017 年度奨励賞」を受賞している。学会の運営においては、年次大会実行委員長（2016 年）、年次大会企画セッションのオーガナイザー（多数）を務められたほか、2020 年から本学会の理事・編集委員長を務めておられ、学会誌の魅力向上に貢献されている。このように、リスク学の実践者、および本学会活動の牽引者として、今後も大いに期待されるところである。以上のことから、本学会の理事候補者の一人として、村上道夫氏を強く推薦する。</p>